

程も小き麵包を取り元の所に退り再び挨拶し徐々と歸りたり。少女の家には病たる一人の母あり、娘の持ち來りし麵包を切たればバラ／＼と澤山の銀貨の溢れ落しに母は驚き、定めて誤つて麵包の中に這入しならん、娘よ早く持往きて返すべしと命じたり。娘わ直ちに戻し往しに彼の慈善家は否々誤りに非ず故意と最も小き麵包の中に入て焼かしめたり。此品わ汝の満足心と平和心を賞美せんためなり、汝ち「フランチシカ」よ終身左様に致し居れよ、誰でも大なるものゝ爲に戰ふより寧ろ小さものを以て満足する時は、此麵包の如く後來大なる幸福を得に至るべし

三人の親友

北斗女子譯

茲に親密なる三人の朋友ありたり。如何なる場合といへども互に助け合ひて恰も一体の如く吉凶共に必らず相分たんことを盟約したりき。

或時甲友に突然止を得ざる金子の必要を生じたるを以て近き所に住たる乙友に使を送り何程か都合だけの金額の借用を申し送りたり。乙友は直ちに過分の金子を財布に入れ封印して渡したり。甲友は此金子を受取りて將に開封せんとする際忽ち丙友より書面來り何事なるやと直ちに之を讀下せば金子借用したし併し是非と云ふ程にあらずと認めありたり。されど甲友は自分も金子の爲め究迫し居ることを思ひ合はせ只今乙友より受し封印づきの財布を惜氣もなく其儘に渡したり、されば其財

布には果して幾許の金子ありたるやも知らざり

き。丙友は之を待せ置きたる使者に渡したり然る

にこゝに又乙友は先に甲友に貸て手元に金子少き

ときは不都合と思ひ、万ーの豫備の爲にて金の

用達を丙友に請ひたる次第なりしが、相憎丙友其の

時丁度所持せざりしより又甲友に使者を送りて借

受來りし金子を又其儘乙に渡したり。乙友之を見

るに自分より甲友に送りし財布にして、而も封印

も自分が附たる其儘なりければ大に不思議に思

ひ、翌日三人會合を催はし夫々互に前記の次第を

相詰して始めて譯が分り果ては大笑したりとい

ふ。

### 第三號問題の答解

吳市

一狂生

(一) 東京に在る河を支那川(品川)と云ふが如し

(二) 一人の吏員を群(軍)吏と云ふは如何

(三) 市より服役し居るものを郡(軍)人と云ふは如何

全

人

